

第4節 記録にみられる地震被害とコレラの蔓延

1 棟札に書き残された記録—竹脇家棟札（縦34.7cm×横94.0cm×厚さ1.5cm）

棟札が発見された竹脇家は射水市堀岡の旧家で、明暦のころ（1655）放生津潟（現・富山新港）の西側に居を定めた。以後代々にわたり潟の周辺の新田開発に私財を投じて努力し、近隣農民から敬慕された。竹脇家累代にわたり4か村もの村建をしたので新田才許となり、安政地震のころは山廻役に就任していた。

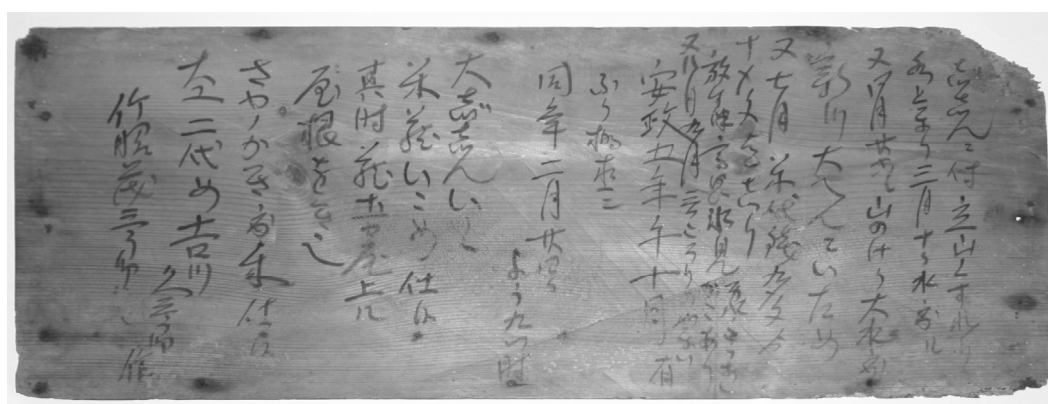


写真3-3 棟札（射水市新湊博物館所蔵）

志志ん^{（地巻）} 三村山くすれり^{（崩）}
 水とまり三月十日水出ル
 又四月廿六日山のけり大水出
 新川大へん^{（地巻）} いため
 又七月米代銭九貫文より
 十貫文迄志り
 放生津^{（崩）} 高岡氷見^{（こわし方）} こうあし
 又八月九月三日ころりのやまい有^{（病）}
 安政五年十月
 ふり棚直シ^{（夜）}
 同年二月廿四日よい九ツ時
 大志志ん^{（地巻）} いく
 米蔵いため仕候
 其時蔵土台上ル
 屋根をき也
 さやのかき出来仕候
 大工二代め吉川久三郎作
 竹脇茂三郎 □

地震で傷んだ土蔵の修復にあたって、建物の修復箇所の記録だけでなく、地震の発生、3月の泥流、4月の出水に触れ、米価高騰と打毀しからコレラの発生（次項で詳報）まで書かれている。市井の大工が通常の棟札に書かないことをこのように記録したことは非常に貴重な資料である。米価高騰については、「細入村史」では、安政5年12月、細入谷の入口笹津で飯米相場が一石につき金一兩二歩一朱と十六文高になり、安政6年2月には猪谷の三十一軒の難渋人に米二石一斗が支給されたことが記されている。また、打毀しは安政5年7月に金沢で初めて起こり、加賀藩領加賀・能登へ広がり、越中は7月16日以降、西部の砺波地方の町に起こり、さらに新川郡水橋・魚津・富山藩領八尾へも波及する騒動になった。

2 コレラの発生と対策

富山藩越飛国境の西猪谷口留番所役人、橋本家文書は「七月頃より細入谷にコレラが流行して来た。発病後二三日で死ぬことから“三日コロリ”、“サンコロリ”とも言った。この三日コロリの薬法として次のものが触れ出された。」と記している。

公儀^ニ御触有之薬法御申渡左之通

芳香散

上品 桂枝・兼知・乾姜 右細末ニし折々用申

又法 黒豆壺合、甘草拾貳文、水一升八合煎し用ゆへし

まじなへ札

鞆^ニ乙此字を書門口ニハルヘシ

右病より方

いちじくの葉・八ッ手の葉・山^{しょう}枘・干いも・赤紙・幣紙

メ七品を紙ニ包、水引ニ而結び門口ニはるへき事、如此する時ハ萬之病難のかかる者也。

加賀藩新川郡上条組（富山市東部地区）十村杉木家文書に次のものが発見された。

安政六年八月

流行病為療養芳香散被仰付貧民之者江割付帳

上条組

覚

一、貳千三百六拾四人

上条組村々之内貧民共江

芳香散被下候ニ付人数高

此薬七貫九拾貳匁 但壺人ニ付 三匁宛

右私当分才許組江 今般^{ぼうしや}暴瀉病（コレラ）流行死人も多々

有之ニ付貧民共江、芳香散壺人ニ付三匁図りを以

御渡被下候ニ付

調合方向寄薬種屋等江申付急速可相渡候条

被仰渡奉得其意 即調合為致相渡置申候人数

等書上之申候

東長江村

未八月廿二日

彦右衛門

新川

御郡所

上条組59か村内の貧民2,364人に芳香数（1人分3匁）を下げ渡されることを願い出たことが書かれている。

新川郡の加賀藩政の実態を伝える十村役文書史料は、今日極めて残り少ない。長い年月の経過と明治2（1869）年に起こった「ぼんどり騒動」（減免を要求した農民一揆）による打毀しと放火や、十村家の他県転出などにより、ほとんど残されていないのが現状である。

そうした中で上条組杉木十村家に残されたのは数少ない史料である。天保10（1839）年の記録では上条組管下の村数は59か村であった。

安政5（1858）年は世界的にコレラが流行した。同年6月長崎港に入港した米艦ミシシッピの乗組員がもたらし、全国に広がり、加賀藩領にも8月に入り多くの病没者が出た。杉木文書の日付が8月末になっており、コレラの波及が急速なものであったことを物語っている。

幕府は、8月23日御触書を出し、治療薬として「芳香散」と「芥子泥」を使用することを勧めた。